

V 図書館

【到達目標】

- ・学生及び教員に対して、学習と情報収集に適した環境を提供する。
- ・図書館利用を通じて地域に貢献し、地域と連携を深める。

IT革命が叫ばれ、インターネット上で様々な情報が提供される時代となった今日、学術情報の提供において中心的な役割を担う大学図書館にあっては、進展著しい今日の学術情報の質的・量的変化とその技術動向を踏まえつつ、いかに迅速・的確な情報を利用者に提供できるかが重要な課題となっている。

和歌山県立医科大学図書館（以下「紀三井寺館」という。）は、平成10年5月に移転され、新図書館として新たにスタートした。昭和56年5月、和歌山県立医科大学将来構想検討委員会を設置し、以来4年半にわたり審議が進められてきた中で、新図書館については、教職員及び医療技術者を対象とする「研究」、学生の「学習」、学外医師等の「生涯学習」の場としての機能を重視し、かつ情報を収集・蓄積する新しいメディアを備えた図書館とすること、また、職員・学生等の活用に便利な位置とし、シンボル性のある施設とすることが基本計画に組み込まれていた。

紀三井寺館では旧図書館には無かった夜間及び土曜日の開館を開始した。

また「情報検索から原報提供までの一元化」を目標に、各種データベース、学内所蔵目録、学外文献複写依頼の3システム連動による図書館システムをはじめ、学術論文検索や文献調達依頼ができるようサービスの向上を図った。

これら利用者の要望に最大限に応えるべく種々のサービス提供により、他大学には無い大きな特色をもった図書館となった。

紀三井寺館と三葛館との連携

紀三井寺館と三葛館との連携については、図書館システム「LIMEDIO（リメディオ）(株)リコー製」を平成16年12月に導入し、開発及び業務系システムの運用を両館で開始した。それまで別管理であった三葛館とのシステムを統合し、利用者カードやデータの統一を実現し、両館における教育・研究支援の向上を目指し、「情報検索から論文入手」までを一元的に操作し、「情報検索」「所蔵検索」「文献複写申込」を連動させ、両館の教職員・学生等の利用者ニーズに対応する環境を整えた。

また、所蔵資料については、横断的な検索が行えるようになり、図書館システムの稼働により、文献デリバリーサービスを開始しており、利用者からの要望に応え、現物貸出デリバリーサービスの運用も行っている。

今後の展望

世界中の情報が居ながらにして検索できる状況にあつて教育・研究のあり方も大きく変化しており、大学図書館の方向は単独での存在からネットワーク対応型図書館へと大きく変化している。平成10年の紀三井寺館開館によって、本学における学術情報の提供環境は大きく前進した。利用者は基本的に図書館に向くことなく、的確・迅速かつ時間的に制約されずにサービスを受けられる環境となった。当館は新しい施設やサービスを提供してはいるが、それらはサービスを行う上でのツールと考えており、紀三井寺館の目的はあくまでも教育・研究活動における学術情報を、迅速かつ簡便な方法で利用者に提供していくサービスの実現にあると考えている。紀三井寺館はそれらの環境に一步近づけることができたと考えるが、今後ますます増大する学術情報に対し、常に利用者を意識しながら教育・研究に必要な学術情報の収集、整備を通し、大学への貢献を図ると共に、県内地域医療を支援する情報の拠点として今後とも先駆的な図書館づくりを目指すとともに、期待される役割を積極的に果たしていくことが、紀三井寺館としての存在意義を明確に位置づけるものとする。

また、紀三井寺館と三葛館の相乗効果により、それぞれの学部の個性や特色を伸ばしていくこと、さらには医学・保健看護学に対する総合的な「学習」や「研究」並びに「地域貢献支援」に努めることが重要である。

1 紀三井寺館

1-1 図書、図書館の設備

◎主要点検・評価項目

- ・ 図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性
- ・ 図書館施設の規模、機器・備品の整備状況とその適切性、有効性
- ・ 学生閲覧室の座席数、開館時間、図書館ネットワークの整備等、図書館利用者に対する利用上の配慮の状況とその有効性、適切性
- ・ 図書館の地域への開放の状況

(1) 施設・設備

【現状】

当館は、図書館棟の1階及び2階にあり、延床面積は、約2,380㎡で、利用者の様々なニーズに応えられるように新たな施設が数多く設備されている(表V-1)。

大きな特徴として自動入退館システム、資料無断持出防止装置(BDS)を整備し、平日22時まで、土曜日10時から17時までと図書館利用時間が大幅に拡大された。

各フロアに設置された情報検索コーナーにはパソコン6台を設置し、各種データベースやインターネットを使った最新医学情報検索ができるようにした。また、パソコン7台を設置し、レポート作成やプレゼンテーション資料作成のための機器も用意した。

閲覧席は130席を設置した。グループ学習のための部屋を1室、論文作成に利用できる研究個室も8室用意するなど、様々な利用者のニーズに応える施設・設備が整えられた。

“学部の顔”を構成する重要な建物であり、建物形態は西側正面に対して45度の傾斜をもつ大きなガラスの壁(カーテンウォール)をデザインしている。

その周囲の光景を写し込み、四季の色や空を写すシンボリックな建物であり、快適な環境に恵まれた近代的な図書館である。

表V-1 延床面積及び施設

内 訳	面 積 (㎡)	備 考
総 面 積	2,379.53	閲覧座席 130席
閲覧スペース	903.10	
書庫	260.64	
事務用スペース	176.52	
その他サービススペース	394.75	
その他	644.52	

【点検・評価】

当館の延べ床面積は約2,380㎡であるが、移転前の旧図書館と比較すると、約2.7倍の面積となり、学生1人当たりとしては「平成17年度大学図書館実態調査結果報告」(文部科学省研究振興情報課、平成18年12月刊)(以下「実態調査」という。)の全国平均1.2㎡に対して4.7㎡とかなり余裕をもった面積を確保できた。

閲覧席は130席用意でき「実態調査」の1席あたり学生8.9人に対し、当館は3.9人と群を抜いた座席率を確保できた。

新たな施設の効果は大きいものがあり、後ほど詳しく述べるが、土曜日開館及び夜間延長の導入により、入館者は旧図書館に比べ増加した。

情報検索コーナーでは、3種のデータベースが利用でき、本学所蔵検索によりデータベースへのアクセスも可能となり、特に学生の急激な利用増加により館内で利用される資料も3倍に増え、教育・研究支援に有効に機能している。

AV機器7台を導入し、ビデオデッキ、CD-ROM等を接続させることにより、教育支援に有効に機能している。

グループ室は、1室12人の部屋を1室用意し、教員・学生のセミナー及び本学のチュートリアル教育の一助となっている。

情報化への対応を積極的に取り込み、利用者に充分満足を与え得る情報発信基地としての機能を充実させた図書館である。

【改善・改革に向けた方策】

当館は、図書館としての施設、設備面においては、現在のところ特に大きな課題はないが、教員・学生のセミナー及び本学のチュートリアル教育をより充実させる必要から、セミナー室やグループ室の増設が望まれる。

(2) 図書館資料

① 図書・学術雑誌の整備状況

【現状】

本学の蔵書数（過去3年の図書数）は表VI-2のとおり、学術雑誌の受入数は表VI-3のとおりである。

図書館において重要視される学術雑誌は、研究者の研究活動にとっては不可欠のものであるが、国外学術雑誌の価格高騰が続く中で、購入予算の実質的漸減により購入誌数を削減せざるを得ない状況にあり、利用者からの不満が増している。

なお、図書・学術雑誌の選定方法は、図書については教員からの推薦図書を中心に、学術雑誌については教員推薦の上、図書館の運営方針の決定機関である医学部図書館委員会において購入方針を決定し実施している。

表V - 2 蔵書数 (単位：冊)

年 度	図書の冊数 (冊)		定期刊行物の種類 (種類)		視聴覚資料の 所 蔵 数 (点数)	電子ジャーナルの 種類 (種類)
	図書の冊数	開架図書冊数 (内数)	内国書	外国書		
16 年度	94,804	94,804	3,314	2,680	510	32
17 年度	95,771	95,771	3,314	2,683	529	33
18 年度	97,800	97,800	3,324	2,638	588	37

表V - 3 過去3年間の資料受入状況 (単位：冊)

年 度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
紀三井寺館	1,572	967	2,029

【点検・評価】

当館の蔵書数は97,800冊だが、「実態調査」の学生1人あたり91冊に対し、当館では193冊と約2倍の数となっている。ただし医学分野の図書は約10年で利用価値が半減するため、内容の古くなっているものも多く見受けられる。

学生用図書については改訂版など新しい内容のものを揃える必要があるが、購入予算が充分ではなく学内外の協力を得ている状況である。

学術雑誌については、国外学術雑誌の価格高騰が続く中であって毎年購入誌数を削減してきている。学術雑誌の価格高騰が続く中では、現行の購読方法では本学で必要とする雑誌数を維持できない状況にあり、学内講座からの寄附及び他大学等からの寄贈交換による資料も欠くことができない。

また、近年急速に普及してきた電子ジャーナルについては、その速報性や利便性が要求され、紙媒体から電子媒体の移行要求が教員より寄せられている。

【改善・改革に向けた方策】

図書については、学生の勉学に資する図書の補充が充分に行われていないため、常に蔵書の

見直しを行い、質的改善を図る必要がある。そのためには学内外からの協力はもとより、図書整備予算の拡充を図る必要がある。

学術雑誌閲覧誌数拡大のために、平成15年度に向けては図書館資料の予算の伸びが見込まれないことから、大学全体として資料費の効率的な執行の見直しを行う必要がある、図書館と講座とで重複購入している学術雑誌の学内1誌化をすすめ、更に閲覧雑誌数の拡大・充実を図るため、現在全国的に推進されている電子ジャーナル・コンソーシアム（共同購入）事業に積極的に参加することも必要であろう。

②目録情報の整備、図書館資料の管理・保存

【現状】

本学所蔵資料のデータベース化については、平成10年の図書館システム導入に向けて、平成9年から2ヵ年計画で、遡及作業により図書、雑誌合わせて約6万5千冊のデータ入力を完了した。

移転時に、図書館所蔵の資料について、各教室の図書担当者による取捨選択を行い、現行医学にそぐわない図書の処分を行ってきた。

図書館購入資料については、夜間開館を考慮して全面開架方式をとっている。

また、書架全体の収蔵可能冊数は約20万冊で、新図書館開館後約20年の余裕年を考慮した。最後に、視聴覚資料については、館内に設置した6台AVブースで利用を認めている。

【点検・評価】

新図書館への移転後10年が経過したが、書架スペースについては、各教室購入の図書及び雑誌の図書館への移管・管理換えなどが多く、当初の計画より早く書架が埋まりつつある。

【改善・改革に向けた方策】

講座から移管・管理換えされた資料については、図書館と重複しているものを除籍して保管スペースの確保を図るとともに、図書や学術雑誌は紙媒体から電子媒体への移行を余儀なくされつつある。

(3) 利用

①開館日数及び入館者数と開館

【現状】

図書館の開館時間は、表VI-4のとおりである。

平日は午後10時まで、土曜日は午後5時まで図書館利用が可能となった。

開館日数は、表VI-5のとおり、入館者数は表VI-6のとおりである。

利用対象者は、学内者はもとより本学元教職員、本学卒業生をはじめ、県立の医科大学として地域に貢献すべく、各地で地域医療に従事している学外者にも利用を可能にしている。入館に必要な利用者カード（IDカード）については、学内者に限らず医療に従事する関係者にも発行を行っている。

表V-4 開館時間

開館時間	月～金 9:30～22:00 土 10:00～17:00
休館日	日曜日、国民の祝日、蔵書点検期間（通常8月中） 年未年始（12月28日～1月4日）、その他臨時休館日

表V-5 開館日数

(単位：日)

年 度	開館状況		
	開館日数	うち土曜開館	うち日曜開館
平成16年度	294	51	0
平成17年度	292	51	0
平成18年度	292	50	0

表V-6 入館者数

(単位：名)

年 度	入館者数				
	教職員	学生(含院生)	学外者	計	一日平均
平成16年度	12,016	39,923	306	52,245	178
平成17年度	11,680	38,839	367	50,791	174
平成18年度	10,335	34,159	312	44,756	153

【点検・評価】

平日午後10時、土曜日午後5時までの開館については、学生の要望をほぼ満たしている。開

館日数は292日と大幅に拡大され、「実態調査」の平均開館日数266日を上回り、ほぼ通年の図書館利用が可能となった。土曜日の開館も「実態調査」の57日とほぼ同様の50日に及んでいる。開館日数については「実態調査」では個別の大学の数字は把握されていないが、この開館日数の拡大により、入館者数は4万5千人となり、1日の平均入館者数も約150名となっている。また定期試験や国家試験時期には通常時期の2倍を超える利用がある。電子図書館システムの導入により教員は研究室に居ながらにして各種情報が入手できる環境となったことからか、入館者層の約8割が学生（含む院生）で占められている。

【改善、改革に向けた方策】

現在は日曜日・祝日を休館としているが、国家試験及び定期試験等を考慮し、平日夜間及び土曜日の時間延長、さらに日曜日・祝日の休日開館の拡大に向けて検討しなければならない。

②資料の利用

【現状】

学部学生は貸出冊数に制限があるが、夏季・冬季休業期間中は貸出冊数の増冊や貸出期間を延長して便宜を図っている。また、貸出資料の予約については、利用者がコンピュータから直接予約できるシステムとなっている。

資料の貸出冊数は表VI-7のとおりである。

表V-7 館外貸出冊数

年 度	館外貸出							
	教職員		学生（含院生）		学外者		計	
	人数	冊数	人数	冊数	人数	冊数	人数	冊数
16年度	1,301	2,711	6,716	10,177	0	0	8,017	12,888
17年度	1,072	2,234	4,703	7,126	0	0	5,775	9,360
18年度	1,004	2,099	4,191	6,384	0	0	5,195	8,483

【点検・評価】

図書館資料の館外貸出冊数は8,483冊となり、「実態調査」の平均貸出冊数21,383冊をかなり下回っている。利用冊数・貸出冊数の減少の理由として、図書を購入する予算が斬減してきており、思ったほどの図書を購入できていないのが大きな要因である。そのため、利用者からす

れば、最新の情報が得られないため、利用しづらいと思われる。

③広報・利用指導

【現状】

新図書館開館に伴い、各種の情報提供方法が大きく変わったため、広報、利用指導については積極的に取り組んでいる。特に情報検索については各種データベース等の利用指導の要望が多い。特に、大学院生（修士課程・博士課程）に関しては、平成17年度より大学院共通科目講義を設け、図書館長及び職員が「医学文献情報の収集」というテーマについて、講義の中でデータベースの検索指導を行っている。

また、データベースの導入時には、その都度ホームページに掲載し、利用者への啓蒙活動を積極的に行っている。

広報活動は、図書館利用案内をはじめ、情報検索案内・リンク集等を図書館ホームページにより学内利用者に情報を発信している。

特にホームページは掲載コンテンツの内容から「第2の案内カウンター」としての役割を果たしつつある。

【点検・評価】

大学院（修士課程・博士課程）については、講義において情報検索指導を行っているが、限られた時間内での周知には限度があり、カウンターでの個別対応を積極的に行い周知の徹底を図っている。

広報については、刊行物として、図書館利用案内を発行しているが、広報誌としての役割を果たしているとは言いがたい状況にある。

図書館ホームページは平成13年から開始したが、平成19年度には10万件を超えるアクセスがあり、極めて高い数値といえる。これはホームページのもつナビゲーション機能を十分に生かしたシステム構築が行われている結果ともいえる。

【改善、改革に向けた方策】

利用者自身の検索支援へ向けて各種ツールの使い方、文献の探し方、インターネット上の情報資源の探し方などのマニュアル等を整備する必要があるとともに、的確なアドバイスができる専門的知識を維持していくため職員の能力向上が不可欠である。データベースを始めとする電子情報の把握と本学に必要とされる情報の収集、情報検索関連技術の習得など自己啓発の機会を積極的に設けていく必要がある。

また、ホームページから、24時間・365日図書検索や文献複写申込依頼が可能となり、利用者にとって格段便利となったが、さらにホームページというメディアの速報性、広域性を生かし学外への情報発信を含め、生涯学習時代の広報手段として利便性を考慮したうえで更なる充実を図っていく必要がある。

(4) 地域医療支援

当館の地域医療支援についてはこれまでも随所で述べてきたとおり、県内が行うべき重要なサービスとして位置づけており、開学当初より本学卒業生を中心とした県内医療従事者への文献複写提供サービスを行ってきている。また平成10年12月の当館システム運用開始より、多くの地域医療従事者からデータベースの公開が強く望まれていたが、データベースの利用についてはライセンス契約上、学内利用者に限定しているのが現状である。

(5) 相互協力

【現状】

限られた予算の中で利用者の求めるすべての資料を揃えることは極めて困難であり、学術情報等の資料の提供に関し他大学との協力は図書館の重要な業務となっている。

当館では、開学当初から日本医学図書館協会加盟館を中心とした全国医科系大学をはじめ平成9年度には、国立情報学研究所（旧学術情報センター）の相互協力システムに参加し、他大学との相互協力を積極的に進めてきた。さらにインターネットを利用したシステムにより、利用者は当館に足を運ぶことなしに文献依頼が可能となり、利用者の申込手続の簡略化とともに当館での事務処理能力が効率化され、利用者、当館双方にとって大きな利便性が図られた。

平成18年度の受付件数は表VI-8のとおりである。

表V - 8 受付件数

(単位：件数)

年度		2004年度	2005年度	2006年度
受付件数	相互依頼・ 複写	3732	3098	2928
	相互依頼・ 現物	17	6	7
	相互受付・ 複写	1953	1781	1333
	相互受付・ 現物	4	6	3

【点検・評価】

文献受付件数は1,333件であり、「実態調査」の平均受付件数1,303件より若干上回っており、その内75%が大学図書館からの申込みで、残り25%が個人その他の医療機関からの申込みである。

また、他大学等への複写依頼件数は、2,928件であり、「実態調査」の平均依頼件数1,580件と比較すると約2倍となっている。この数字は、利用者のニーズに応える資料が確保されていないことが浮き彫りとなっている。当館での資料の充実整備が今後の大きな課題である。

【改善・改革に向けた方策】

図書館相互利用は、“加盟館の好意と特典であるが権利ではない（日本医学図書館協会相互利用規約より）”という理念に基づくものであるから、他大学に依存する件数が大きい当館としては、学術雑誌の収集・整備への積極的な対応が急務の課題であろう。

1-2 学術情報へのアクセス

◎主要点検・評価項目

・学術情報の処理・提供システム整備状況、国内外の他大学との協力の状況

(1) システム整備状況

【現状】

図書館システムは、平成16年12月に「LIMEDIO (リメディオ) (株)リコー製」が導入され、開発及び業務系システムの運用を開始した。

従来までの図書館システムを移行し、それまで別管理であった保健看護学部図書館 三葛館とのシステムを統合し、利用カードやデータの統一を実現した。

本学における教育・研究支援の向上を目指し、「情報検索から論文全文入手」までを一元的に操作できるよう、「情報検索」「本学所蔵検索」「他大学文献複写申込」を連動させるシステムとなっている。

【点検・評価】

システム利用登録者数については表VI-9のとおりである。

利用登録者数について見れば卒業生も含めた学外利用者数が622名となっており、地域医療支援に対する成果を見ることができる。

またデータベース検索の結果、当館に所蔵しない資料の複写申し込みについては、旧来の手書き専用申込書による申請は皆無に等しく、ほぼ100%インターネットを介しての申し込みとなり、システムの24時間運用と相俟って教育・研究支援に対し有効に機能しているといえる。

従来の図書館システムは、本学内のネットワークに限られていたため、外部からのアクセスが不可能であったが、現在は「情報検索」や「他大学文献複写申込」が外部からのアクセスが可能になったことで、利用者にとって便利なものとなった。

また、「論文データベース検索(情報検索)」「本学所蔵検索」「他大学文献複写申込」を連動させたことにより、利用者の論文入手までの操作の手間が削減されるようになった。

医学図書館において雑誌所蔵のデータ管理は重要であるが、現システムでは雑誌管理システムの運用に合わない項目、必要な項目が画面に非表示であること等が見受けられ、カスタマイズも不可能である。

保健看護学部図書館 三葛館とシステム統合し、データを共有しているが、従来の運用の違いから、共有の制限が必要な部分があるが、現在のシステムの運用では不可能である。

表V - 9 利用登録者数

区分		人数
学内利用者	教職員	1475
	学部学生・大学院生・研究生・聴講生	1208
	研修医	135
	小計	2818
学外利用者	卒業生	215
	その他の学外利用者個人	407
	小計	622
合計		3440

【改善・改革に向けた方策】

今後は、雑誌管理システムを重視し、本学図書館の運用に合ったシステムの改善が可能かどうかを考慮すること、三葛館とのシステム統合によりデータを共有した部分でそれぞれの図書館の運用に合わせ切り分け可能なシステムを実現すること、利用者にとってさらに簡便に操作できるシステムに開発していくこと等、が課題である。

また、新システムの評価を行い、次期システムの更新に際して、最低限現状を維持したうえで、より効率化を目指す必要がある。

(2) 機器等の整備状況

【現状】

図書館が所有している機器等は、サーバー3台、業務端末6台、利用者端末6台である。

サーバー機器3台については、個々の処理を安全かつ効率的に集中管理し、制御している。

うち2台は、データベース層を構築したサーバー（OSはUNIX）であり、情報機器室を設置している。また業務サーバーと検索サーバーと別々に管理し、安定した業務処理とデータを安全に確保している。

もう1台は、アプリケーション管理層を構築したアプリケーションサーバー（OSはWINDOWS）であり、事務室内に設置し、業務ロジックを制御している。これにより、システムの保守性が

高くなっている。

端末に関しては、利用者端末を情報検索用、目録検索用とし、OSの嗜好性を考慮し、WINDOWS、MACINTOSH併せて6台設置している。また、業務用端末については、職員1人1台とし、業務の効率化を図っている。

ネットワークの特徴としては、紀三井寺館、三葛館間をVPNで繋げ、並列式の本学独自のネットワークを連携している。

表V-10 機器構成及び設置台数

区分	台数	備考
サーバー	3	業務用×3
業務用端末	6	デスクトップ×6
利用者用目録検索端末	6	Windows×5、Macintosh×1
利用者用端末(研究個室)	0	

【点検・評価】

サーバーは、セキュリティと負荷を考慮されており、それぞれの機器は十分な容量と安全な管理が可能である。

サーバー2台は、情報機器室に設置し、24時間体制での冷房設備があるため、温度管理ができる一方、サーバー1台は事務室内にあるため、機器の温度管理が一定ではない。

配線の関係で、サーバー1台のみ事務室内に設置しており、情報機器室に設置するには工事が必要とされるが、既存のネットワーク回線を工事することは容易ではない。

また、利用者端末MACINTOSH1台については、ウイルス対策において個別ソフトによって管理しているため、WINDOWSのウイルス対策とは違い、困難を伴う。

【改善・改革に向けた方策】

利用者端末は、本学利用者数に対して、台数が不足している。

今後は、本学学部生の定員増もあり、また保健看護学部の利用者も論文データベースの検索等に利用されるようになったことから、機器台数の増加が求められる。

2 三葛館

和歌山県立医科大学図書館三葛館は、平成8年4月に和歌山県立医科大学看護短期大学の開学と同時に同図書館として開館し、平成16年4月に和歌山県立医科大学保健看護学部の開設と同時に和歌山県立医科大学図書館と統合され現在の姿になった。

【沿革】

- 平成 8年4月 和歌山県立医科大学看護短期大学部図書館開館
- 平成15年4月 図書倍増5ヶ年計画実施開始
- 平成15年8月 書架増設工事
- 平成16年4月 和歌山県立医科大学図書館と統合され和歌山県立医科大学図書館三葛館となる
- 平成17年2月 ホームページの開設
- 平成18年3月 照明増設工事 閲覧席・AV書架増設
- 平成19年3月 入退館システム導入

2-1 図書、図書館の整備

◎主要点検・評価項目

- ・ 図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性
- ・ 図書館施設の規模、機器・備品の整備状況とその適切性、有効性
- ・ 学生閲覧室の座席数、開館時間、図書館ネットワークの整備等、図書館利用者に対する利用上の配慮の状況とその有効性、適切性
- ・ 図書館の地域への開放の状況

【現状】

看護学及び保健学分野の専門図書及び逐次刊行物の網羅的な収集、その周辺領域である医学、心理学、社会学、教育学分野の図書の収集等、教養科目及び専門科目に関する基本図書の収集に努め、整備を行ってきた。

さらに、看護学の古い基本図書や看護学の原書等、洋図書の収集にも努め、学内の教育・研究を

支援し、県内看護職の情報センターとしての使命を果たすために蔵書の整備に努めている。

平成18年度末現在、図書は37,187冊(和書31,381冊、洋書5,806冊)、雑誌は643タイトル、視聴覚資料は1,273点を所蔵している。その他に、蔵書数には含まれていないが、和歌山県の統計資料や保健・医療・福祉に関わる行政資料を意図的に収集している。

図書は、看護短期大学部が開学した平成8年度末には14,803冊(和書12,070冊、洋書2,733冊)であった。保健看護学部の開設を控えた平成15年度より、他の看護系大学図書館の平均蔵書数を実現するために、蔵書倍増5ヶ年計画をたて、特に看護学の洋書を中心に、蔵書の充実を図ってきた。分類法は、国内の図書館で広く利用されているNDC(日本十進分類表)8版を採用しているが、そのうちの看護学[492.9]の図書については、日本看護協会看護学図書分類表にしたがって整理し、別置している。こうして看護学に分類される図書は、平成18年度末には製本雑誌を除くと7,668冊(和書5,975冊、洋書1,693冊)であり、全蔵書数の20.6%に相当する。

所蔵雑誌数は、和雑誌355タイトル、洋雑誌106タイトルであり、このうち、購入雑誌は、和雑誌164タイトル、洋雑誌101タイトルである。図書と同様に、平成15年度に開始した蔵書倍増5ヶ年計画により、それまでの雑誌タイトル数の1.5倍に増加している。雑誌は主に平成7年分から収集しているが、それ以前のバックナンバーは日本看護図書館協会の重複雑誌交換事業や、紀要については発行大学への寄贈依頼を利用して、収集に努めている。また、和雑誌については、学会誌を積極的に購読してきた。平成19年度からは、看護を含めた周辺領域の洋雑誌の更なる充実と、主に医学系雑誌の補完を目的に、CINAHLにフルテキストを追加したCINAHL with Full text と、メディカルオンラインを新たに契約し、電子ジャーナルの導入を行った。

視聴覚資料は、短期大学部開学時より、学生の自己学習を支援する目的で、看護学及び医学分野を中心に整備を進め、合計1,273点所蔵している。視聴覚資料の形態の変化に伴い、平成17年3月には、DVDプレーヤー2台を設置し、収集においてもビデオからDVDへシフトする方向にある。

上記資料の選定は、常勤・非常勤の教員及び学生からの購入希望を主に、シラバス記載の教科書、参考図書のほか、貸出統計等を基に利用動向を確認しながら行っている。また、平成16年度から、出入業者の協力を得て、教員が図書を実際に見て選定する「見計らい」による選書を実施している。雑誌については、購入希望があったものや文献複写依頼の件数が多いものについて購読の検討を行っている。これらの資料が、オンライン蔵書目録—Online Public Access Catalogue(以下、OPACという)の整備により学内外からインターネットを利用して効果的に検索することができ、学内者のみならず学外の利用者も学内者と同様に閲覧することができる。

データベースは、医中誌Web、MEDLINE、CINAHL、CiNii、ヨミダス文書館の契約をしている。Web版への変更やアクセス数の追加を行い、利用の便宜を図ってきた。

機器・備品の整備状況は下記の通りである。

延べ面積	647㎡
座席数	50席(グループ学習室2室内の12席含む)
書架収容能力	書架棚総延長1.44km、図書収容能力約4万冊、新着雑誌架棚数300棚
AV機器	9台
コピー機	2台
情報機器	パソコン6台、プリンタ1台

閲覧室の座席数は現在、50席である。保健看護学部学生数336人(平成19年5月現在)に対し、42席であったのを、平成18年3月に、レイアウトを工夫して、閲覧席8席を増設したところである。

開館時間は、平日午前9時より午後9時であるが、夏期及び春期休業期間は、午前9時より午後5時30分となる。夜間開館時間の延長を機に、平成19年3月、従来の退館システムをリプレースする形で、入館者を管理することが可能な入退館システムを導入した。

図書館ネットワークとしては、短大開学時より国立情報学研究所のNACSIS-CAT/ILLに参加しており、目録業務の効率化を図るとともに、所蔵していない資料の相互利用に有効に作用している。学内ネットワークとしては、平成16年12月に、かつての図書館業務システム(以下、図書館システムという)を紀三井寺館と共通の新システムに更新(以下、リプレースという)したことにより、両館の蔵書を同時に検索できるOPACを備えることができています。また、平成17年2月に三葛館の独自ホームページを開設し、学術情報の検索への入口として機能している。

図書館システムをリプレースしたことにより、学内外からインターネットを利用して本学図書館の蔵書の所蔵確認や利用状況の確認を行うことができるようになった。また、学生や教職員へのサービスとして、貸出中の資料に対するオンライン予約や、当館にない資料の文献複写および現物貸借依頼をオンラインで行えるようにした。さらに、当館で提供する契約データベースの検索結果を利用して文献複写の申込が行えることは研究者の利便性向上に有効に作用している。また、教職員に対しては、紀三井寺館所蔵資料の複写物のデリバリーサービスを行っており、迅速な情報の入手に貢献している。

機器やネットワークを整備するだけでなく、かねてより情報リテラシー教育にも力を入れている。入学時には図書館の施設とサービス全般を紹介するオリエンテーションを実施し、看護短期大学部生には2年次に指導教員と連携して図書館独自で文献検索講習会を実施してきた。

保健看護学部生には、3年次の「保健看護研究」において、授業に協力する形でデータベース利用法を中心に文献検索に関する講義を行っている。このような情報リテラシー教育は、学部内にとど

まらず、平成18年度より附属病院看護師に対しても実施している。また、学外からの要請に応じて、和歌山県看護協会による実習指導者講習会や県内看護専門学校の看護学生に対しても実施している。

このような情報リテラシー教育の実施は、自立してデータベースの検索をすることができ、資料やデータベースの特性を理解して、効果的に情報入手ができる利用者の育成を目指したものであり、計画的な講習会等の実施に加え、レファレンスとしてのデータベース利用指導を行うことで、少しずつではあるが、着実にその目的を達成しつつある。

広報活動としては、ホームページの提供に加え、「図書館利用案内」や「図書館報みかづら」を印刷物として発行し、配布している。

当館は、看護短期大学部開学当初から学外利用者に対して開放してきた。

閲覧については、幅広く認め、当館の資料を必要とする者であれば誰でも、入館時に手続きをすることによって、閲覧、複写サービスが利用できる。さらに、契約データベースを利用した文献検索も、学生や教員に支障のない範囲で使用できる。これに伴う利用指導も要望に応じて行っている。また、館内でのビデオやDVDの閲覧も可能である。

図書の貸出については、学生や教職員の利用を最優先とし、その利用状況や要望を勘案しながら進める必要があるため、当初制限していたが、看護短期大学部の最初の卒業生を出した翌年度の平成11年度から、卒業生に対して貸出サービスを開始した。

平成16年度にOPACをインターネット対応のものに変更したことで、地域の利用者は当館の所蔵を確認した上で来館利用することができるようになった。また、同時に、和歌山県図書館協議会が運営する「図書館コンソーシアム和歌山」に完全参加することができ、県内図書館の蔵書を横断検索することができるようになった。

学外者の利用状況は、平成16年度が583人(1日あたり2.5人)、平成17年度が628人(1日あたり2.6人)であった。平成18年度末現在では、937人(1日あたり4.0人)であることから着実に利用が伸びている。利用者の傾向は、県内全域に勤務する看護師や県内の看護専門学校学生だけでなく、大阪府南部に勤務する看護師や看護専門学校学生の利用も多い。

【点検・評価】

蔵書構築については、資料収集方針の策定が検討に値するが、カリキュラムを反映した必要領域を体系的にカバーした資料を保健看護学部図書委員会が中心となって、保健看護学部教員全員によって選定しており、学生をはじめとした利用者による購入希望や利用動向が反映されているのは評価できる。

看護学の図書は、全領域を網羅する方針で収集しており、和図書についてはほぼ網羅的に購入

できており、洋図書についても充実してきている。看護学図書の全蔵書に対する割合は20.6%とそれほど高くはないが、これは看護関連図書が他分野に分類されてしまう分類のいたずらによるものである。量的にも、平成15年度より実施している蔵書倍増5ヶ年計画により、計画的に整備されていることは評価できる。ただし、蔵書倍増5ヶ年計画に対する予算を除いた予算については、外国雑誌の価格高騰が国内雑誌や図書、視聴覚資料の購入費を圧迫している状況は否めない。

雑誌は継続的な購読が基本であるが、外国雑誌の価格高騰や資料の利用頻度、紀三井寺館の所蔵などを考慮し、必要に応じて見直しを行っている。その充実の程は、学外への文献複写依頼件数が少なく、逆に依頼を受ける件数が多いことからもうかがえる。

コンパクトな空間に、図書スペース、雑誌スペース、AVスペース、閲覧席、検索端末が配置されているため、効率よく情報の入手ができ、利便性が高い。一方、収容能力の点から見ると、看護短期大学部開学時の収容能力は、約3万冊であったため、平成15年度に約1万冊分の書架増設工事を行ったが、再び満杯に近づいているので、今後、書庫スペースの確保が問題である。

機器については、DVDプレーヤーを設置することで、情報メディアの多様化に対応し、当初1台であった利用者用コピー機を1台増設して、コピーの混雑を緩和することができた。

情報機器の整備やそれらを利用した情報リテラシー教育の実施には現状において問題なく機能している。しかし、閲覧スペースには検索端末周辺にしか情報コンセントが設置されていないため、自身のパソコンを利用した学習やグループ学習室を利用した検索指導などには対応できていない。

保健看護学部学生に限定すると、学生数に対する座席数の充足率は14.9%であり、十分とは言えないが、既存の建物を利用してレイアウトを工夫することで8席を増設できたことは評価に値する。

開館時間については、従来、平日の午前10時より午後6時30分であったところ、平成17年度より夜間開館を実施し、現在では委託職員を配置することで夏期及び春期休業期間を除き午後9時までの延長を実現することができた。しかし、午後5時30分から午後9時までの時間は、司書資格を有しない者の勤務となるため、レファレンスなどのサービスが制限され、利用の便に支障をきたす場合もある。夏期及び春期休業期間については、利用者数が多くないことから従来の時間設定で十分であると判断している。なお、入退館システムの導入により、入館者管理が可能となり、図書館のセキュリティが向上したことは評価に値する。

情報リテラシー教育の実施については、さまざまな利用者を対象にそのニーズに合わせて継続して行っており、回数も増加している。学内外から要請があることからその有効性が理解できる。これは、図書館のサービスが単に資料の充実ばかりではなく、ソフト面の充実がはからなければならないことを示している。

問題点は、正職員1人での実施には限界があるという点であろう。十分なサービスを行うには、それ

なりの人数と利用者の要望に応えられるだけの知識や経験を積んだ人材を必要としている。

利用者の声を収集するために意見箱を設置しているが、ここ数年は図書館に対する目立った要望は見受けられない。また、平成18年度に行った学生アンケートにおける、図書館の利用しやすさについての質問では、学生のほぼ全員が図書館を利用しており、利用している学生のうち74%が利用しやすかったと回答している。

開学時より当館の資料を必要とする者であれば広く学外者の利用をすすめてきた結果、県内看護職の情報センターとしての役割を果たすために機能しており、学外の機関からも文献検索講習会の要請があり対応してきたことは評価できる。一方、学外利用者に対するレファレンスや利用指導には多くの時間を必要とするため、人的資源の不足が懸案事項となっている。

また、枠組みに限定することなく学外利用者を受け入れてきたことにより、資料の延滞や情報機器の利用におけるマナーなどで問題点が出てきている。

【改善・改革に向けた方策】

図書については、外国雑誌の価格高騰による購入可能数の減少と併せて、蔵書倍増5ヶ年計画終了後の蔵書構築について視野に入れて考えていかなければならない。大学図書館資料の媒体が変化している昨今、紙媒体の図書、雑誌に加え、電子ジャーナルや電子ブックなどの電子媒体資料が教育・研究において不可欠になってきている。

雑誌についても、この5ヶ年計画終了後の購入雑誌タイトルの維持について検討し、紙媒体雑誌の購読見直しと併せて、電子ジャーナルや看護以外のデータベースも含め、資料費全体の予算的措置を講じ、積極的に収集していく努力が必要である。

なお、資料スペースの狭隘化に対しては、書庫を設置するなど何らかの方策を執る必要がある。また、情報コンセントの整備についても、パソコン利用に伴う音の問題を考慮に入れ、個人閲覧席とグループ学習室2室への設置が望まれる。

現在、教職員に対して紀三井寺館所蔵資料の複写物のデリバリーサービスを行っていることに加え、図書館間の図書の搬送サービスの実施について検討していく。

夜間大学院設置構想に対する方策として、さらに開館時間を延長することで、委託職員のみが開館時間が長くなり、サービスの低下につながる事が予想されるため、人員増員も検討する必要がある。また、情報リテラシー教育の実施においては、サービスの質が求められるようになってきた現在、適切な人員配置を検討していきたい。

大学の地域貢献という視点からも、引き続き、図書館を学外利用者へ開放することは重要であるが、利用が増加している現状から考えると、的確なレファレンスや利用指導ができる人員の確保に努め、充実したサービスを以ってその利用に寄与することが求められる。人件費の確保が難しい場合は、サ

ービスの制限、範囲の指定など、枠組みを作っていく必要もある。

2-2 学術情報へのアクセス

◎主要点検・評価項目

- ・学術情報の処理・提供システム整備状況、国内外の他大学との協力の状況

【現状】

平成8年に看護短期大学部開学と同時に整備された図書館システムは、様々な業務上の問題を抱えていた上に、その後のコンピュータやネットワークの高度化に伴い、平成16年末に国立情報学研究所のオープンシステムへの完全移行を控えて図書館システムのリプレイスの必要性があった。

そのため、平成13年度より段階的に予算要求を行い、平成16年12月に、統合した紀三井寺館との同一システムへのリプレイスがようやく実現した。このことで、利用者にとって最も利便性が高まった点は、利用カードの一本化とOPACの統一である。

利用カードについては、各館の貸出やOPAC上のサービスの利用者認証は1つのIDで一元化され、統一したOPACが同時に学内外から検索できるように公開された。これによって、2館の蔵書検索を1回の動作で行うことができ、両館の蔵書の有効利用につながっている上、学外の利用者にとっては所蔵を確認してから来館できるようになった。同時に、文献複写等の相互貸借申込がオンラインで行えるようになり、そのデータを継承して他大学図書館へ依頼ができるようになったため、相互貸借業務の省力化に加え、これまでよりも迅速に文献等の入手が可能になった。

また、オンラインで文献の到着状況や貸出状況等を照会することも可能になっている。その他には、契約データベースとのOPAC連携ができることとなり、OVID社のMEDLINE及びCINAHL、医中誌Webの検索結果を利用して、利用者認証を行うだけで、書誌事項を改めて入力する必要なく文献複写の申込ができるようになっている。

文献検索データベースとしては、医中誌Web、MEDLINE、CINAHL、CiNiiの契約をしている。その他に、平成19年度より、新聞記事検索データベースとして、ヨミダス文書館を契約している。これらは、学内の端末から学内LANを経由して24時間利用が可能であり、図書館ホームページからのリンクを設けている。医学中央雑誌については平成15年度から、MEDLINE、CINAHLについては平成16年度から、それぞれWeb版に変更し、利便性の向上を図っている。

国内外の他大学との協力を進めるために、開学時より国立情報学研究所(旧学術情報センター)のNACSIS-CAT/ILLに参加している。また、日本図書館協会と日本看護図書館協会に加盟しており、図書館界や業務に関する情報を入手し、研修の機会を得ることにより職員の資質向上に有効に機能している。

【点検・評価】

図書館システムのリプレイスは、業務の合理化を進める上で重要であった。このことにより、より充実したOPACを提供できるようになり、利用者サービスの質的向上を実現できている。図書館の資料情報や電子ジャーナルの利用、文献データベースの検索が、ネットワークを通して教室や研究室から24時間利用できることは、大きなメリットである。

文献検索データベースは、最低限必要なものを備え、Web版へ切り替えるなどして利用の便を図っていることは評価できる。しかし、看護学の周辺領域のデータベースの整備については十分とは言えない。

また、電子ジャーナルや電子ブックなどの電子媒体資料については、紙媒体雑誌資料の購読見直しを行い、さらに積極的に収集していく努力が必要である。

国内外の他大学との協力については、国立情報学研究所のNACSIS-CAT/ILLに参加することによって、目録業務の効率化と相互貸借サービスの充実に有効に機能していると評価できる。

【改善・改革に向けた方策】

電子媒体資料について、看護以外のデータベースも含め、資料費全体の予算的措置を講じ、積極的に収集していく努力が必要である。これにより、図書館へ来なくとも必要な情報が入手できるようにし、本当に図書館員の手助けが必要な利用者に対して、充実した人的支援サービスを行うという環境を整備したい。

